



レジェンド オブ ワールド

LEGEND of WORLD

The story of the encounter

プロローグ

私はある目的のために遠征に出ている。自国のため、いや、自分の欲望のためなのかもしれない。いつも民の正義でありたかった私だが、物事が順調に進んでしまうと人はこうも変わってしまうのか。「隊長、兵隊の一人が珍しい代物を見つけてきました。なにやら三つの文章が記されています。」従者が手渡したその石盤には、たしかに不可思議な三つの文章が記されている。だが、どうもこれはそれぞれ別の言語らしい。一つは見覚えがあった。少しだが読める。これはローマ文字だ。二つ目は何だろう、動物か?何かの絵がズラリと並んでいる。だ、規則正しく並んでいるように見えるので、これも文字なのだろう。問題は三つ目だ。なんだろう。これは文字でもなければ絵でもなさそうだ。虫食いだらけで解読不可能だった。この時は。
「ふむ。だが、その兵士はどこでこんな物を拾っていたのだ。」
「三日ほど前にあの砂漠の丘陵地でキャラバンの商人といつの間にか取引をしていたようです。」
「はっはっは。目のつけどころが良い者もいたものだな。この石盤はぜひ我が物にしたい。」
(もしいつかこの石盤が解読された暁には、きっと後世で私の経歴にさらに箔が付くであろうな)
「その兵士には代わりになにか褒美をやると言っておけ」
私はこのように、人の手柄を自分の地位によって強奪することをやめなかった。まさかこんな貪欲な輩になってしまうとは。今日もまた、暖かい光から神秘的な光へと変わる。
「もうそろそろ、この辺りにテントを張る準備をしよう。ご苦労であった。」
百何騎の兵隊を引き連れる事は容易い。だが、兵士たちの事を考えていないわけでもない。こんな長旅に愚痴もこぼさずついてきている事には本当に感心する。
「皆の者。今日もしっかりと休んで明日に備えよ。ご苦労であった。」
兵士がそれぞれ床につく。テントから明かりが徐々に消えていく様は魂の安らぎのようにも見える。
「私もそろそろ寝るとしよう。ああ、ルイズ。君が恋しいよ。君がいない夜をあと何回過ごさなければならぬのかな」
ランプを消そう。恋焦がれていても虚しくなるだけだ、そう思って肩を上げると、昼に従者から受け取った石盤が目に入った。
「それにしても、綺麗な石盤だ。この満月の夜に相応しく神秘的だ。」
眺めているうちに、ランプの灯りをそのままに寝てしまった・・・。
「んん。まばゆい光がまぶたを通して私に呼びかけている。輝かしい朝が来たか。」
私は寢言をいった。なぜ自分が寢言を言ったのがわかったのか。それはのちに。いつの間にか私は歩いていて、まわりには何も無い白い世界を。何とも思わなかった。いつの間にか私は今まで見た事も無いような大きな城壁の前に立っていた。誰かが歌っている。

汝立場を知らず。また、欲望に飲み込まれいていたり。
己の手中にあらざれば、それらを支配せむ。
今、汝を迎える事こそ、我が主の望みなれ。

どういう事だか理解出来なかったが、そう考えた時には既にその主とやらの前で跪いていた。
「石盤に描かれし文字、今こそ其方、読めるであろう」
ずっと持っていたのだろうか。石盤は両手に挟まれて前よりも黒く光っていた。
さらに、先ほどまでは虫食いがありすぎて解読出来なかった所に美しい文字が並んでいた。
「これは。」
私はその石盤に書かれているままに行動していた。そして、いつの間にか数えきれない悪魔達を解放していたのだった。
「汝、我らを使役したまえ。忌まわしき者の手から解放されし今、其方の願い、いくらでも叶えようぞ。」
私は訳が分からないまま、ただ、こう言っていた。
「我、汝らに命令する。この平安の世をかの暗黒の時代に戻したまえ」
ここで私の語りは終わる。またいつか相見えるであろう。
その時まで。

ケヴィンの語り

ケヴィンは言う.....

「君の父上は立派な王だ。しかし・・・いずれはお前が父に代わって王の座に立たなければならなくなる時がくるのだ」

「僕が父の代わりを？キャメロットをまとめるの？」

動揺する幼い少年にできるだけ頬を緩めて

「お前はその時までこのお守りとともに勇敢に生きれば良いのだ」

(私はもう直き愛する女の手によってこの母なる大地深く眠らされてしまうだろう・・・)

しかしお前はきっと"先導者"に巡り会える・・・そのとき私の見るこの未来の歯車が動き出してしまうのだが・・・)

しわの多いその温かい手から、少年に銀の十字架が手渡された。

風と共に

あの日、空からピンクの玉が連なったネックレスが落ちてきたんだっけ。
それで・・・おやすみなさい。そうだ。これがおばさんとの最後の言葉だった。
わたしはその後ぐっすり眠って・・・。

「ああ!! 今日もいい天気ねえ。妙に暑すぎる位だわ! なにか今日は起こりそう!!!」

ぎゅっと寝起きの体を伸ばす少女。彼女の白い肌に光が反射する...。
わんわんと甲高い、でもかわいらしい犬の鳴き声。
子犬は少女に近寄るやいなや、胸に飛びこび甘えの印として白く細い手を甘噛みした。

「早く仕事終わらせて、トートーと遊ぶよ! 待っててね!」

「ドロシーや、そろそろ畑に行く時間だよ。支度はできているかい?」

「ちょっと待ってて、おじさま。すぐに着替えてくるね!」
畑には、今にもこぼれ落ちそうにたわわな実をつけた野菜達でいっぱいだった。
毎年恒例の"竜巻"が今年はまだ来ていないおかげで、新鮮な野菜が食べれそうだ。

「こんなに暖かいと、どこか涼しい木陰で昼寝したくなるわあ」
こんな怠けた言葉を聞いたおばさんは、少し口を尖らせた。

「あんた、さっきまで寝てたじゃないの! まだ若いんだから、そんな事いってないで沢山働いてちょうだい」

「はあ〜い」

一足先に畑で作業していたおじさんがほっぺを可愛げに膨らませているドロシーに近寄り

「こう見えても、彼女はドロシーにとっても感謝しているんだよ。いつもいつもドロシーの話になると、にこやかになるんだから。」

とささやいた。

「ありがとう。おじさま!」

ドロシーは農作業に夢中だったため時間などまったく気にしてなかった。

雲一つない快晴だったのに、突然辺りが暗くなった。

トートーが急に家の方からこっちに駆け寄ってきて、わんわん吠えている。

そして、突如として耳障りなゴーという音が辺りを取り巻く。目の前には今まで見た事も無いような、巨大な"竜巻"が出現していた。

そう、誰かが魔法でも使って呼び起こしたかのような竜巻。

そして、私はというと.....

「な、何なのよ!! うそでしょ・・・さっきまでの晴天が・・・それに何あれ!! 今まで見てきた竜巻とはまるで違うじゃない!!」

今にも足が崩れてしまいそうなを堪え、さっきから吠え続けているトートーをぎゅっと抱き上げた。

(こんな所でばおとしてちゃダメ! 速く"竜巻部屋"へ逃げないと...)

だが、なかなか足が言う事をきいてくれない。

(どうして?? こんな時に金縛りみたいになるなんて! 私ったら呪われでもしちゃったの??)

遠くから祖父母の声が、竜巻の轟音にかき消されるように微かに聞こえる.....

「ドロシヤ!! 早く逃げんかい!! そんな所にいたら連れ去られてしまうぞ!!」

(そんな事言われたって、全然動けないんだもの....!)

心の中で叫んでも、意味の無い事は分かっていた。

もう私の人生も終わりだと思ひ、トートーを腕から解放して逃げるよう促した。

しかし、トートーもまた、そこから動こうとはしなかった。動けないからではなく、主人を守ろうとして。

「トートー! もういいよ! ありがとね... 貴方だけでも生きて....」

涙が少女の目からこぼれ落ちた。それをやさしくなめてあげるトートーの舌は本当に温かい物だった。

(私のせいで...)

そして、とうとう竜巻は彼女達をひょいと飲み込み、勝ち誇ったような轟音をあげながらカンザスの土地を徘徊していった。
キャメロット。それは中世イギリスにおいてログレスの都。

ウーサー・ペンドラゴンが統治するこの都はその気候と恵まれた土地により周りの国よりも栄えていた。

そのためもあり、数年に烏の洪水の如くアングロサクソンを中心とする周囲の者達はその土地を求め襲撃してきた。

だが、その度に伝説の魔術師ケヴィンーまたの名をマーリンという一の聖器による助言のもとで追い返してはいたのだが、今となってはそれも昔の話である。

というのもその当人であるマーリンは愛すべき娘のもとへと行ってしまい、また、聖器も姿を消したためである。

そのため今何者かが襲撃してきたとなるとそれは大変なことであることはキャメロットにすむ人々全てが実感していた。

「五年程前、マーリンは私にこう告げていた.....」

(来る日、この都に恨みを募らせた娘が訪れよう。私の行いが災いを生み出してしまったと)

ウーサーは深いため息をついた。もし彼のこの不可思議な助言が本当になってしまえばこの都はどうになってしまうのだろう?

やっとの想いで造り上げた黄金の都キャメロットをそう簡単に失ってしまったのでは元も子もないではないか。

そうだ。最高の剣術力をもつランスロットと剣の技は強引ながらもその力は上の者にも劣らぬガウェインを呼ぼう。

彼らなら何か対策を提示してくれるかもしれない。

「参りました。今日どのような用件で? 今晚の祝宴についてでしょうか?」

ほっそりとしたしかし女達を魅了するような声でランスロットが訪ねた。

「そのことはモルガーナとそのお付きの女達に任せてある。彼女らの作る料理は宮殿のシェフが作る食事よりもうまい……

っとそんな話をしにそなたらを呼んだわけではない!しかしガウェイン先ほどから何をそんなに綻んでいるのだ」
ガウェインの口が引き締まる。

「ああ……これはすみません。先ほど来る途中アーサー殿に出会いましてな
なんと白く美しいおなごを連れていたのですよ。これはもしやと思ひまして……」
「ふむ。アーサー……己にはグウェンという女がいるというのに」

一人の少女と一匹の子犬が宙を舞う。
「トートー、なんか良くわからないけど、とても綺麗な場所に飛ばされて来ちゃったね」
トートーが「わんわん」と返事をする。空からの光景はとても美しかった。遠くに城下町が見えた。
「なんか、中世の世界に来ちゃったみたい。どうしてかしら」
真下を見回してみると、輝かしい金髪少年が剣術の稽古をしていた。少年は集中していたためまだ少女の存在に気づいていないらしい。

「よし、あの子に聞いてみよっか!」
少女が子犬を抱いて、着陸の準備に入る。スカートが風を受けてふわりと上手くいそいだ。
(ピリピリピリッ)何かしら失敗したようである。
「いやぁ〜びっくりしたぁ!!何なのよいったい。竜巻に飲み込まれたと思ってたらなぜか生きてるしふわふわ飛んでれば急に竜巻消えるし……」
そんな愚痴を言っているうちに幾分たったのだろうか。時間が気になり始めたのは、体に何か違和感を感じたからである。
少女は寒気がしたので嫌々ながら下を覗いてみると……なんと、服が綺麗に裂けているではないか!しかも目の前には顔を赤らめた少年。

「きゃああああ!!ちよっ、ちよっ!!私お年頃なんだから見ないでえ!!」
少年はとっさに片膝を立てて跪いた。
「あっ、ごっごめんなさい!その、僕が稽古に集中しすぎて貴方の衣服を裁ってしまいました……」
さらに顔を赤らめるドロシー。(あら、この子とてつもなく礼儀正しいわ!!紳士的でカッコいいかも……)

「こ、こちらこそ、ごっごめんなさい……。お怪我はありませんでしたか?」
「……。」
「へ?私変な事いいましたか??」
少年はドロシーを見つめた。そして深呼吸すると、
「僕の名前はアーサーといいます。あなたをこのままにしていはいけないので、直ぐに僕の城へご招待しますね。
着替えなら侍女用ですが沢山あるので、遠慮なくお好きな者に着替えてください。」
「わたしはドロシー。空から降ってきたのには分け合ってかくかくしかじか……。」「……そんな事があったんですか。信じ難い話ですね。でもそんな事より城へ行きましょう。服を召された後、きっと私の父上が何か考えてくださいますよ。」
ドロシーはくすくすと笑った。
「先ほどから、お城って言ってますよね。もし王宮の事言ってるんだとしたら、そんなのとうの昔に無くなっているじゃないですか?」

アーサーは目が点になった。だが、流石は未来の王。知恵を働かせて、
「まあそちらも色々あるんでしょうね。今夜は王宮で祝宴があるので楽しんでくださいよ。ね?」
「……?」

今度は目を真ん丸にしながらドロシーが首を傾げたが、アーサーはそんな事気にせず緑生い茂る山を早歩きで下り始めた。なぜ早歩きかというのは、自分の手ではこの娘の手を負えないと確信したからである。こんな事はランスロットのほうが得意そうである。いや、絶対得意だ。

段々と厚く灰色の今にも雨を降らせてもしそうな雲が覆ってきた空を見つめながら下っていると、間もなく家々の集落が見えてきた。
その奥には周りを頑丈な壁で覆った大きなお城。そう。いわゆる城下町だ。ドロシーはこの光景を間近で見たときは戸惑ってしまった。無理もないだろう。しかし、すぐに何となくそれなりの理由を自分に言い聞かせ納得したのである。

「素敵い〜!貴方がさっきいった王宮って本当だったんですね!」
「信じてもらえてうれしいです。さあ、ようこそ我が都キャメロットへ!」
城下町には、普通の民家もあれば食材から武器まで様々なお店が立ち並んでいて空に広がる曇天とは裏腹に賑やかだ。とくに洋服屋なんかは沢山の貴婦人でいっぱいであった。今夜の祝宴のための洋服をこしらえるためであろう。
こんな光景に心を躍らせていると、目の前にはすぐさま首が吊りそうなほど高い壁が広がった。壁の中央にはこれまた大きな門と番人の姿。アーサーが手で挨拶をすると、門は開かれ内部の立派な中庭がお披露目された。中庭の中央には大きな噴水がありそれを取り囲むように葉を生い茂らせた木が植えられていた。何とも宮殿である。そのままアーサーに宮内へと連れて行かれると豪華に宝石をちりばめられたこれまた大きな扉が現れた。
「父上。ただ今戻りました。」
「おかえりアーサー。おや、ガウェインの言っていた通り確かに連れておる。その隣にいるおなごはどなたかね?」
「この娘とは剣術の稽古中に出会いまして。しかしながらとある事情で彼女の服が裂けてしまいました。」

「ふむ。それは御気の毒様。それで用件は?」
「はい。そこでこの娘に服を与えてやりたいのです。」
そして、アーサーはこう続けた。
「それと、旅路で路頭に迷ってもいるようなので、ここにある程度の目処がつくまで預かってやってはいただけないでしょうか?」

「……うむ。確かにお前の用件を却下する行為は騎士道に反するな。良からう。丁度部屋はいくらでも空いている。好きなところで寝泊まりしなさい。」
ドロシーはこの一つ一つ型にはまっている情景に見入っていたので、会話を良く聴いていなかった。だが、何となく自分の事で交渉してくれている事はわかっていたので、

「ど・・・どうも、ありがとう、ございます・・・!えっと、あの、、、」

「はっはっは そう肩肘を張らなくてもよい!我ら騎士にとって当たり前の事をしているまで。どうかゆっくりしていつてくれたまえ!」

無事用事が済み、一段落すんだ所すぐに夜がやってきた。あいにく外は大雨だが王宮内は関係なし。民衆から王宮貴族まで皆でわいわい騒いでいる。

「さっきはありがとうアーサー君。あの、ちょっと訊きたい事が・・・」

「何だい? それと、どうだい?これから長らく一緒に生活なんだしもう少し気軽に話をしようじゃないか!」

「そっそれもそうね!それでなんだけど・・・今って、時代でいうといつ位になるの?」

「え?今は五百と十五年さ。」

「!やっぱり・・・。台風に連れてこられた時点で変だと思ってたけれど、どうやらアーサーとかランスロットとか聴いていると過去にタイムスリップしてしまったみたいね。

・・・なんだかどこかで聴いた事があるような出来事だわ・・・」

「・・・なにをブツブツ言っているんだい? この先の事ならもう大丈夫なんだから目一杯楽しもうじゃないか!」

「ア～サ～!!私のダーリン!」

突如、人前で大声でこっぴどい事を叫んで来たのは、ウォード出身でアーサーの未来の妻であるグウェネビアである。彼女はとても美しいため自分に酔っているらしく大胆な服を着る事が多い。女性があまり得意でないアーサーにとっては色々な意味で危険な人物である。そして、この彼女と別の男がとある事情で恋に落ちてしまいこの都にとって第二の危機をもたらしてしまうのはまた先でのお話。

「グウェン!!お願いだからそんな大声でいわないでくれよ!こっちはとっても恥ずかしいんだから・・・」

「そ・ん・な・こ・と、言わないのおっむむむ!アーサー。その隣にいる私よりは綺麗じゃない女はだれかしら?」

「あっああ、こちらわね・・・ぐふうああああ!!!」

「なにが『こちらわね』よ!気軽にほかの女とイチャつかないで!その女も女よ!!私とアーサーが許嫁だって知ってるのに誘惑?」

「あわわわ、ごっごめんなさい!差し障りがあったようですね。すぐにこの場から消えますんで!」

「しっしっしい～!!二度と近づくなぁ～!!ふう。追っ払ったわ。ア～サ～!!どう?私って勇敢な女でしょ!!さぁ、一緒に食事でも・・・」

グウェンの視線の先には無様にも顔から突っ伏しているアーサーの姿があった。

さて、ドロシーの方はこれまた素敵なお部屋にいた。雨が時々顔に当たる。同時に何かもどかしく寂しい感情が沸々とわいてくる。

何気なく側にいたトイブドルのトートーはそんな彼女のために何かできまいかとうろろ辺りを回っていた。

トートーが一回りするごとに風が次第に強まってくるような感じがした。

っとその時、ドロシーの横を嵐の如く一筋の風が通った。それは宮殿内に入るやいなや辺りにある豪華な食材や装飾品を全て台無しにしていった。会場の人々は大慌て。アーサーは警備員にすぐさま誘導命令を出したがそう簡単にはいかない。たとえ大きなドアだとしても、大勢の人々が一斉に外に出られず、押せや引けやの大騒ぎ。

一筋の風は寂しそうに、

「ここが、貴方の言っていた都。キャメロットなのね。あなたをあんな目に遭わせなければならなかったのはすべてこの平安な都のせい。」

アーサーはどうとうこの時が来てしまったのかという想いで一杯になった。

「おっお前はまさか・・・」

「楽しい宴会の最中でしたか。申し訳ございませんわ。」

疾風から現れたのは綺麗な娘だった。

「ただ、私は女神の名において、この都を正しに来たのですわ。」

「ランスロット!!ガウエイン!!頼む。邪な者を崇拜する奴を止めてくれ!!他の部隊も計画通りかかれ!!」

「まあ。ペンドラゴンの名に相応しくないお言葉ですこと。誰によってここでキリスト色に染まってしまったのかしら」

ランスロットは部隊を三つに分け三角形を作るように配備させると、ガウエインと共に警戒態勢に入った。

だが、迂闊に攻撃はできない。騎士道に反するからだ。

「どうしたの?何もなさらないんですの?それじゃあ円滑にお話をなさいませうか」

そう娘は言うのと、辺りの大気が疼きはじめた。この見た事もない光景はすぐに好奇心から悪夢へと代わる。

「太古より伝わりし決断より、今、裁きの力を解放する!!」

女の手にする杖に何とも美しい光の粒が集まると、色は次第に深紅に染まりはじめた。

娘と裏切り者

見るにも麗しい女は、どうも魔女であるらしい。
魔女とは、この世に存在すると言われる「精霊」と協力する事によって人並みはずれた力を使う事ができる人の事。

「今ここに集まっている力は我々「聖魔術師」にとって愛おしき存在によってもたらされているのよ!! ただキリストを崇拝する輩にはわからない神秘の力!!」

魔女はその杖に宿した見るにも恐ろしい紅の球を辺りに思うがままに降らせた。その光景まさに地獄絵図。ある者は攻撃をまともに受け、ある者は避けきれなく肌が焼けこげて……。そんなことで、王の廷臣や駆けつけた庭番など多くの者達が犠牲となった。部隊の大半も崩壊しており、中にはもう逃げ出している者の姿も見えた。

ただ、ガウェインや、ガレス、ランスロットやアコロンなど、ある特定の人物は何にも影響しなかった。
激しい傷を負った王、ウーサーは擦れ声で言う。

「やはり貴様は薄汚い魔法使いなようだな。」

「いいえ、今何かしら負傷を来した者達は、我が主を悪魔などと罵るキリスト教徒のみです。」

「なに?」

「ペンドラゴンの血を受け継ぐ貴方がこうして負傷したのも、貴方が裏切り者だからです。」

「何を言っているのかよくわからないな。」

「では少しお話ししましょう。」

驚きの色を隠せない人々をよそに、魔女はまたもや杖を振るう。だけれど、なんだか様子がおかしい。
安定しなく荒々しいものの、魔法の力はさっきよりも大きいのは確かなのに。

「汝、元は我らと同じ主を崇めたり。しかし、司祭の手によりて変貌を遂げつ。」

「貴様は、一体何者なのだ!!!」

体の奥から寒気を感じたウーサーは、絶望に浸った。

「今申し上げた通り、貴方は代々私たちと同じ主の下で、この世を生きていくと誓いました。しかし、この世の司祭らは、貴方に新たな主を与えてしまった。」

「その司祭と言うのがパトリキウスの事ならば、新しい主とはやはりキリストの事か。」

「先ほどからそう申し上げておりますわ。そして、貴方は新たな主の下、我らの主を罵倒しはじめた。当初、そんなつもりは無かったのかもしれませんが。」

「確かに、私は女神を崇拝していた。」(皆には悪魔を信仰していたと言われたくなかったので隠していたが。)

ウーサーが荒い呼吸で続ける。

「我が妻も、女神を崇拝していた。だが、彼女はある時何処かの尼僧院へと行ってしまった。誰も見つけられない所へと。私はとても悲しんだ。そんな時、パトリキウスが私の前に現れてこう言った。」

「貴方の悲しみは、民の苦しみに比べれば何とでもなる事です。キリストは私を通して貴方にこう言われました。

(汝、我が御許にあれ。民を解放せよ。さすれば、汝、苦しみより逃れらるべし)と。」

「それは大きな間違いですわ。その悲しみは何か貴方の心に呼びかけているために起こる現象なのです。悲しみを無にしてしまうその神こそ邪ではありませんか?」

「だが、その言葉によって民は救われた。」

「それはどうでしょう。あなた、自分の民を助けるために、「古き民」を攻撃なさいましたね。」

「ああ。奴らは法などに縛られずに自由な生活を送っていたからな。そんな奴らをこの小さな陸に留めさせては我が統治が上手く行かん。」

むっとした娘を顧みず、ウーサーは

「それに、我が主はこうも言われたのだ。(戦いによって得た物こそ、己の源である)と。」

「それはパトリキウスとやらを介して言われたのですか?」

「そうだ。」

娘は、ウーサーを哀れな人だと感じた。

さきほどから居眠り(?)をしている者が一人。彼は娘の話を耳にすると、あるなつかしい夢を見た……。

昔から親しくしてくれていた年寄りが一人。自分の側にいつもいる。彼は毎日面白い話をしてくれていた。遠く、まだ誰も足を踏み入れた事のない大陸のお話。世にも奇妙な三種の珍品の話。時には、未来の出来事まで語ってくれたっけ。ああ、どれもこれも懐かしいと思っていると、それはついに霧の湖に……。

「お前はいつか王になるが、その前に大きな災厄が訪れるだろう。

だか、お前を導いてくれる者が必ず、きっと現れるだろう。さあ。何も心配する事はない。お前ならきっと……私は……ずっとお前の側にいる。」

この言葉が彼との最後の会話であったためか、暖かい、いつまでもあってほしいその夢はついに覚めてしまった。

思わず涙が少年の二つの深い谷からこぼれ落ちる。熱い二つの谷から。その熱さは周りを取り巻いている魔法の炎よりも何倍も熱い。

「お前が……」

娘がチラリと下を見ると、いつの間にか少年が真下に。

「少年、いつからそこにいたの? 君はまだ若いのだから、早くその騎士達とともに逃げてなさい。用があるのは、この国の王だけですから。」

「うるさい。お前が、おじ様を……。僕は知っていたさ。もちろん聴いていたからね。だけどそんなおじ様の作り話だと思っていた。だけど5年ほど前に別れてからというもの、あの時にまた戻りたいといつも思うようになったさ。そして、そんな女なんかとは縁を切ってほしいって頼みたかった!!!」

アーサーはふいに短剣を鞘から抜き出すと、娘に飛びかかた。娘のスカートが音も無く裂ける。アーサーは王宮で様々な剣術を学び、その中で出会ったブロードソードは良く手になじんでいて素早い動きをもたらした。あまりの素早さに流石の娘も直ぐさま距離をおく。

「その剣術はたぶんキャメロットの伝統だと思うけど、それにしては・・・。」
「おじ様が言っていた、災厄と言うのはお前の事だったのか!」
「ケヴィンがそういったの?」
「ああ。だけど、おじ様はいつも僕の隣にいて言ってくれた。だから、僕は立ち向かうよ」
「ちょっとだけ見直したわ。 だけど、何か違うわね」

娘はアーサーに魔法をかけた。
「汝、葛藤を顧みず、今、ここに眠れ!!」

これにはアーサーもお手上げ。無様にも喰らってしまった。本当に眠っているのだろうか?死んでいるようにも見える。さあこれには王は仰天。すっかり意識を失ってしまう程の始末。まだ生き残っていた周囲の者達は大いに嘆き悲しんだ。これからを担う我が王子がこうも無残にやられてしまっは、何も考えずに見ている者などいるはずもない。テラスからこの光景を娘にバレないように見っていたドロシーは、

「何なのよあれ・・・。 アーサー!!」

どこから沸き上がってくるのだろうか、そんな勇気を振り絞って、いつの間にか、彼女はアーサーめがけて走った。娘の横を通り過ぎるのもおかまい無し。何にも恐れずに走った。さあ大変。女性、しかもまだ若い娘が諍いに躍り出てきてしまったので、

「おおい!! その若い娘よ!! まだこんな所にいたのかい!? ここはとても危険だから、すぐにでもこの宮殿から出るんだ!!」

ランスロットが出来るかぎり説得をしたが、ドロシーは一向に退く気はなかった。それどころか、アーサーの所にたどり着くや否や剣を掴んだ! 周りの人は、彼女は気でも狂ってしまったのか?と疑った。

「よくも。」

「なに、何か用? あなたのような小娘が出る幕ではありません。さっさと立ち去りなさい。」

「アーサーに何をしたの?まさか本当に永遠の眠りにつかせたなんて無いわよね?」

「何を言っているのかしら・・・」

娘が台詞を言い終わる間もなく、一筋の風がドロシーを取り巻き始めた。澄みわたった、見る者の心を励ますようなエメラルド色の風。

その風は一陣の渦を巻くやいなや、ドロシーを王宮の外へ放り出そうとした。

ドロシーが自分でもわからない言葉を口ずさむ。

「精霊よ。我、汝を使わしむる。この魔法から我を解放せよ」

突如としてドロシーの周りから風が消える。娘は驚き、つぶやいた。

「あっあなたは・・・まさかこんな所でお目にかかれるとは。」

ドロシーはいつの間にか気を失っていた。

「ウーサー。あなた、まだ我が主に見放されていなかったようですね。これに免じて、今回は手を引きましょう」

娘はまた一陣の風となり、消えていった。

その時の様子は、風がかすかに揺れ動いたようにしか普通の人々には感じられなかったようだ。

それから、数時間がすぎ、まず始めにドロシーが目を覚ました。

ドロシーは事の騒ぎが集結しているのを知ると、とても安心した。

アーサーが娘に挑みかかった時以降の記憶は一切なかったらしく、アーサーが眠っている事もすっかり知らなかったので、

「娘はあのあとアーサーがお倒しになったんですよね?」

っと、何のためらいもなくいってしまった。

周りの人々の表情が一気にこわばってしまったので、とっさにランスロットが事の一切を話してあげた。

「そんな・・・」

ドロシーは、初めてこの世界であった青年がその日のうちに死んでしまうなんて、希望の光が一瞬にして消えてしまったなんて、と、狂ったような感情に包み込まれてしまった。

宮殿中、皆、悲しみにふけていると、何やら陽気な声が聞こえてきました。そう。グウェネビア姫。

「もう皆さん。なにをそんなに悲しんでおられるのよ? 変な人はもう殺っちゃったんでしょ?? それにアーサー、さっき私に腹を落とされてからいつまで寝てんのよ! もう、アンタが寝ている間にとっても大変な出来事が起こったのよ!」 「ただ、それも勇敢な人々のおかげでケリがついたみたいですけどね。」

グウェンがこう言っている姿をみていると、ますます周りの人々は悲しくなるばかり。しかし、どうした事か。アーサーが寝ている方向からうめき声が聞こえる・・・。また、グウェンがアーサーをひとたび蹴ると、

「うう・・・いったいなあ!! こんな事するなんてグウェンしかいない!!」

ひょいっと、それまで死んでいる者だと思われていたアーサーが陰気な声を上げて起き上がった。この現象は先ほどの娘の魔法に秘密があるらしいが、それはまた別の機会に・・・。

その日の祝宴は台無しになってしまったが、アーサーの無事と、迷い込んだお嬢さんによって今回の危機をなんとか治める事が出来た事はキャメロットの民衆にとっては祝宴以上の賑わいの元になった。そして、その日から盛大なお祭りが行われ、キャメロットの人々は活気を取り戻そうと皆で努力しはじめた。